美山の中世と義経

梅田　秀彦

源九郎判官義経、この人物程、日本人の心を強くゆさぶり、長く哀惜の情をかち得た人はない。

あの弥生の空に、咲きほこる桜の花のように、爛漫と咲き、一陣の風にはかなく散っていった、その余情は何にたとえようもない。

笛を吹きながら、京の五条の橋の上に現われる色白の美少年牛若丸、それは幻に近い。

しかし一の谷の平家の陣屋へ、ひよどり越えの岩壁上から「赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧着て、鍬形打ったる甲の緒をしめ金ぷくりんの鞍にまたがり」駈け下った若武者義経。

だが、五年後、強い軍略と手練を持ちながら、兄に刃向うことの出来なかった義経。

国の涯、平泉で、頼る味方にあざむかれ、今はもう望みもなく、持仏堂の前で、最後の祈りをし、最愛の妻と子を刺し、自らも又、潔く自刃し果てた義経。

この時義経はわずか三十一才、まことに「花の生命は短かり……」であった。

「この義経が美山に現われ、温かくもてなされ感謝のかがみを熊野社に寄進し、遠い平泉へと、去っていった云々。」

これは、美山の古い伝説の一こまである。しかし私は今この短い一こまに執着しているのである。

果して、義経はこの美山へ来たのであろうか。それはどのようにして誰をたよって来たのであろうか。敗将義経・逃亡者義経を、温かく迎える人達がいたのであろうか。

天下の死刑仕掛け人ともいうべき、執念の頼朝に対抗出来る支持者がいたのであろうか。

この気持ちは、単なる判官びいきではなく、美山の中世の解明の為、そして、義経の実像にせまる課題であり、私はここ二十年ばかり、この検証に力をそそいできた。

そして今、〝美山の中世と義経〟という課題に魅せられ、まとめてみようと思っている。

幸い中世の歴史も、近年多くの資料が発見され、多くの先覚者によってまとめられ、分析と総合、系統化が進んでいて、歴史の真実への検証が容易になってきた。

だが、中世といえば八〇〇年も古い事である。真実への検証はそう簡単ではない。

それに美山の歴史は、美山での事件、人物事象のみを調べても無駄で、美山の歴史は、美山の周辺の歴史との関係に於いて、又、越前国との関連、そして、日本歴史の流れとひろがりの中で考えねばならない。

そう言えば、幅が広くなり、まとめにくいので、私は前述の「美山の中世と義経」に的をしぼって、楽しい気持ちで、中世の旅をしてみたいものと思っている。

(1) 成通と義経

中世とは、一般に源頼朝の鎌倉幕府成立以後、織田信長の上洛まで四〇〇年をさす。

しかし、私は今美山の中世の証明の為更に百年許り前から調べてみることとする。

「白河天皇の御代、応徳元年(一〇八四)この年越前の守、源高実、牛ヶ原荘を醍醐圓光院に施す」と。

大日本史では更に詳しく、「白河天皇の中宮は、右大臣源顕房の女で、その方を関白師實が養女とし、延久三年(一〇七一)東宮に入り、白河天皇の女御となり、永保元年(一〇八一)中宮となられた。その方は大そう天皇の寵愛を受けられたがわずか三十八才でおなくなりになった。天皇はいたく悲しまれ圓光院を醍醐山に建て中宮の骨をおさめられた。御名を藤原賢子と申される」と記されている。

美山の東、計石から花山峠を越した所が京都の醍醐寺の荘園となったのである。

記録を見ると、「牛ヶ原を醍醐寺領として立券し、その土地の四すみに、境界の標示ぐいを打ち、同時に浪人を集め、二百町の荒野を開墾した」と記している。

なお、この年賢子の御子がわずか八才で位につかれ堀河天皇となられた。よって白河天皇は上皇となられ、有名な院政を始められたのである。

この院政は、藤原氏の勢力が余りにも強いので、その摂関政治に対抗して行なわれたものである。

この頃、義経の祖父、源義家は陸奥守後三年の役を果たし、勇名天下にとどろかせ、承徳二年(一〇八九)初めて、院への昇殿を許されている。しかし余りにもその名が高く、荘園を義家に寄進するものが多いので、院宣で禁止される程となった。

次に保安元年(一一二〇)平忠盛、越前国国司となり、大野、真名川以西八十町を牛ヶ原庄領に加うと記されている。

大野地方の開拓の勢力が、応徳元年(一〇八四)には源氏の勢力下にあったものが三十六年後の保安元年(一一二〇)には平氏の勢力下に入っているのである。これはなぜだろうか。

それは院政の主、白河上皇の強力なる配慮がそこに働いていたのである。

白河上皇は藤原氏をおさえるために院政を開かれた。又源氏をおさえるために、源氏と似た武士の地位にある平氏を育て、院の力とされたのである。平氏の越前領有の最初は、康和四年(一一〇二)平正盛の若狭守受領からである。そして彼は院へ近づく事を考えた。

白河上皇は女院賢子の死去の後、その形見の内親王を深く愛されたが、この内親王も又二十一才で崩ぜられた。上皇の気のおとされ方は甚だしく、崩御の翌々

日出家され、内親王の追福を祈るため、その御座所の六条院を又御堂に改められた。それを聞いた平正盛はすぐ六条院に所領を寄進して、六条院を本所とあおいだのである。

この寄進によって正盛と白河院との関係は密になり、遂に正盛の子の忠盛の時代には越前国司として成長し、白河院が中宮の追福の為、圓光院を建てられると、その費用をまかなう為にと牛ヶ原荘を寄進するまでに力が伸びていたのである。

この頃から越前で、平氏の地盤は、土地、住民と深いかかわりを持って、強力に育っていったものと思われる。

長承元年（一一三二）九月、牛ヶ原荘から朝廷に訴えた文書は、「牛ヶ原の領域を約五〇年前の応徳の昔に復して欲しいと願い出た。それで朝廷ではこの希望を許し、宣旨が出された。」しかし「国司、之に応ぜず、同年藤原成通、木本、舌、坂尻、左開を私領す」と官符は記している。

この国司とは、成通のいとこの顕保であり、当時の越前大椽は成通の兄伊通であった。成通はその協力を得て、牛ヶ原荘の領域近くに広大な私領荘園を作りあげたのであろう。

この中の坂尻とは「美山の河内のまと坂の尻」即ち、黒谷の事であり、大野の上庄、小山のあたりを占有したわけである。

更に長承二年には「牛ヶ原庄内、泉郷を、藤原成通、領有せんとしたるも寺家これを訴えて、勅裁にて大野河以西の中央を以て、圓光院領と境界を定む」とあり、「同年成通、川原郷、山中郷、穴馬郷の一部を私領す」と官符は記している。

「醍醐寺新要録」をみると更に詳く「川原郷、参議藤原成通これを領有、六月十四日の官符に、小山郷内、舌村、木本小山村、小山坂尻村、左開村、川原郷内、折立村、川原村味美村、有羅河内、佐々熊足河内、穴馬河内等、所在の田畑、数百町に及ぶ。見聞するものその耳目を疑う」と記される程、広々とした荘園として開拓されていたのである。

牛ヶ原荘、泉郷への進出をこばまれた成通は、すぐ川原郷、山中郷、穴馬郷へと進出した。

これらの古文書は醍醐寺側の立場から書かれたもので美山関係では詳しくないが現在の美山町の上味見・下味見地域が、藤原成通の私領荘園に加えられたことがわかる。

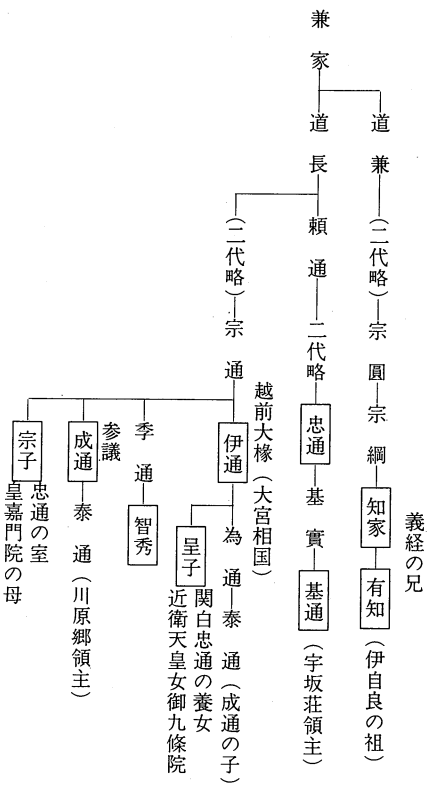
部落名としては、折立、河原、中手（古くは中手のみを味美といったのだろうか）河内（藤原成通にとっては上庄、小山が本所であるから坂を越えた味見側は裏といったらしい）この四部落しか名が出ていない。他の部落はまだ部落として発達していなかったのであろうか。

ここで上・下味見の荘園領主となった藤原成通についてその人物を調べてみよう。

成通は右大臣俊家の孫、権大納言宗通の第四子である。九才の時、病にかかりある僧都に頼んで、毎日祈禱をしてもらっていた。

あまり病がぬけないので、父宗通が祈禱僧をかえようとした所、成通は、「私がまだ母の体内にある時から僧都は修験

○美山町中世の領主の系譜（図1）



ばや　物の心ゆくまで〃

すると院の中から少女が走り出てきて、成通に言うには「この院の中に狂女がおりまして今まで、どんなよい薬も、良医も効果がなく困り果てておりましたところ、今あなたさまの御歌をおききして、狂体がたちまち止まりました。おかげで今静かにねむっております。

これはあなた様の御歌の尊い御力だと思います。どうか今一度お歌い願えないでしょうか。」と頼むのであった。成通は、すぐ院の中に入り心をこめて次のように歌った。

〃いずれの仏の願より千手の誓ぞたの
もしき、枯れたる草木も忽ちに　花
咲き、実のなる時の来たれば〃

成通の歌が終わると、狂女はぱっと目を見ひらき喜びの涙をこぼし、ついには病がすっかりなおったという。

このように成通は不思議な技を持った人であったが、彼の父宗通は「お前の身の軽いのは朝臣として、ほめたものではない」といましめ、鳥羽天皇も忠告された者として、私の病のなおるよう祈ってくれた。今九才まで生きていたのもその効験のおかげだと思う。それに今まで祈禱してくれた効力が今からあらわれるかもしれない。どうかそんな心配はしないで欲しい。」と言った。その言葉に父宗通はもちろん、一同深く感激したという。

この成通が十五才になると、不思議にも、病はすっかりなおり、スタイルまですらりとして美しい衣装がよく似あったという。

成通は、人がよい行いをすると涙まで出してほめたたえるという情熱家で、文学的素養と、技能的能力はずいぶん秀でていたらしい。

或時、雲林院（うんりんいん）の近くで蹴鞠をやっていた時のことである。急に小雨が降り出したので、成通は軒下に飛びこんだが、あまりたいくつなので、神歌を口ずさんだ。

〃雨ふれば、軒の玉水つぶつぶといは

しかし成通は死ぬまでこのような所業をかえなかったという。

だが、彼の神歌は格調高いもので、道教的修験の匂いと、白河院の今様の味を面白く教えてくれる。

味見領有の頃は、三十六才の円熟した頃であった。平治元年（一一五九）出家して栖蓮と号した。

そして、応保二年（一一六二）六十六才でなくなった。

次に成通の兄、伊通について説明するわけであるが、ここでようやく義経に関係が及ぶ所であるから複雑であるが、書いてみようと思う。

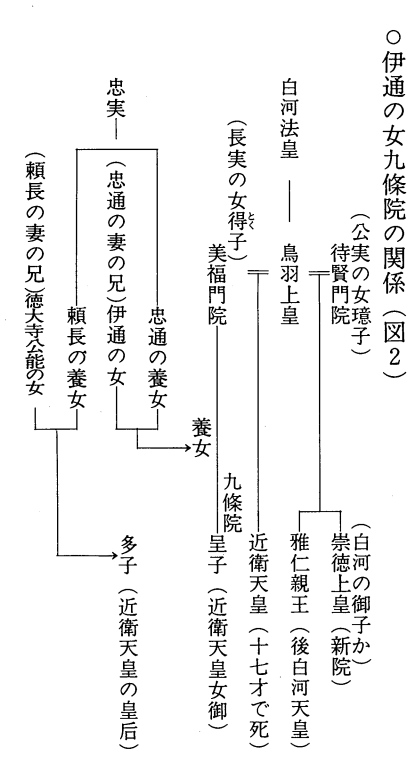
右大臣俊家の孫で、父は宗通、保安三年、（一一二二）参議に任ぜられたが大治五年（一一三〇）他の同僚四人が権中納言となったのに、伊通は選に入らなかった。伊通はそれを恥じ、辞表を出し、朝廷に出仕せず、節会の式の日に、びろう毛の車をこわし、人通りの道の真中で燃やし、よごれた衣装をきて遊びまわったという。しかし、伊通の子の為通が、崇徳天皇の寵を得たので、伊通にも朝廷への出仕をすすめられた。当時関白大政大臣は藤原忠通であったが、忠通の室に伊通の妹が嫁していたので、忠通は伊通の気持ちを察し、やはり反対していた。それでも崇徳天皇は、鳥羽上皇にまで口添えしてもらい、遂に伊通を説得させられた。そこで長承二年、伊通は陣座に於て権中納言の位を授けられたのである。

この頃は藤原氏の時代であったが、院や天皇の外戚として権力を持つ事が彼等の大きな夢であった。

忠通の弟の頼長は、賢才との誇れ高く、父忠実に愛されており、徳大寺公能の女、多子を養女とし、これを近衛天皇の女御として入内させ、皇子の出産を待っていた。

一方、忠通も、伊通の妹、宗子を室としていたので、伊通の女、呈子を養女とし、更に美福門院の養女とし、近衛天皇

○伊通の女九條院の関係（図2）



の女御とし入内させ、皇子の出産を待っていた。（図2参照）

弟、頼長には、父忠実が味方し、忠通には、美福門院（近衛天皇の実母）が養女として味方していた。この争いがやがて、平治の乱に発展するのであるが、それはしばらくおき、（成通の兄）伊通の子、呈子は、女御であるので、女院と言われ、九條院と呼ばれた。

この九條院呈子は、久安六年（一一五〇）従三位に叙され入内、御歳二十才輝やくばかりの美しさであった。

九條院の入内の為、伊通の長男、為通は蔵入頭中将中宮権大夫になり、伊通の室は、従四位上右京大夫となり、伊通の弟、成通は従三位権中納言に任ぜられ待従を兼ねることになった。

平治物語に次のような文章がある。

「九條院の中宮、位につかれし時、都の中より、みめよき女、千人をそろえて、その中より百人、又百人の中より十人すぐりいだされた。その中に常磐という雑仕あり、千人の美女の中で、第一の美女であった。その美しさは、漢では揚貴妃、日本では小野小町もこれ以上ではなかった。」と記している。

この常磐が義経の母なのである。

それから六年目、久壽二年（一一五五）近衛天皇は、わずか十七才で崩御された。その日、中宮呈子は尼となられ、御年二十四才であった。

永暦元年（一一六〇）正月、常磐の夫、義朝は戦に敗れ、尾張国、内海で不慮の死をとげた。

六波羅の常磐追捕の手はきびしくまず母が召しとられた。

常磐は母の命をたすけようと幼なき三児を引きつれて、六波羅に出て来た。

三児とは今若、乙若、牛若（義経）である。

自首を覚悟した常磐は、この世のお別れに旧主、九條院にいとまごいに参上した。

その時の様子は平治物語にくわしい。

女院は、子供を連れた常磐を御覧になって「どうなされたのです。最近、何事がおこったのですか」と申された。常磐は「子供の生命を助けようと、大和の或る所にかくれていましたが、とがもない母の生命まで危うくなりましたので、六波羅へ自首しようと思いお別れにまいりました。」と述べると、女院は、大層哀れに思われ、「最後のよそおいは私がしてあげましょう。」と、女院の御衣装を、常磐に着せられ、子供達の装束までそれぞれに下さった。常磐は悲しみの中にも喜んでお別れを言って出ようとすると、御車まで準備されて、小さい子供と常磐を乗せて送られた。と記されている。

このように、成通の姪女院と、義経の母常磐との関係が心悲しく結ばれているのである。

そして又、九條院の雑仕を、義朝の妾とした事実は忠通、伊通、成通と義朝との関係、そして院との関係であろうか、強く深く結ばれていたことが確認できるのである。

次に、成通の私領、小山郷、川原郷、山中郷、穴馬郷はどのような受領形態で

あったのだろうか。

その資料はあまり見あたらない。それで成通の他の地にあった荘園を調べてみよう。

紀伊の国伊賀郡に神野、真国の荘がそれである。これは康治元年（一一四二）鳥羽院庁下文案によって詳しくわかる。

このあたりは、高野山の入口であるが、天暦の頃（九四七）帰化人が開拓した所と言われ、この年、長依友という者が相伝してのち高野山に仏聖料用途として寄進した所である。しかし国衛から収公されそうになった為、権中納言成通に寄進し安全を計ったといわれる。

だがこれは、長依友から直接成通に渡ったのではなく、初め備後法橋智秀という僧侶に地主職をゆずり、その仲介により、成通家を領家とした。

この智秀とは、醍醐寺派の三井寺の僧で、成通の甥（成通の兄、季通の養子で実は伊通の子）である。（図1参照）

この神野・真国荘は高野参詣の一街道に沿っているので、院の高野参詣の重要な位置にあった。そんな関係からか成通は院に本家職を寄進した。

この関係から考えると、上・下味見を私領していた成通は領家となっている。そして鳥羽院を本家としている。

大野地方の古い文献を見ると、長承二年大政官符で、鳥羽院の御封内若狭国六十五烟、越前国四十八烟を高野山に施入されたことが記されている。

わが大野の成通荘園も後には、神野真国荘の如く本家は鳥羽院とし、領家が成通であった事が考えられる。それではその下の預所は、どんな人物がいたのであろうか。

それに元暦元年（一一八四）になると鎌倉から派遣された代官が入部して来る。

北条氏の代官である。この代官は翌二年になると地頭として位置づけられるのである。

○神野真国荘の支配関係（図3）

①康治二年（一一四二）の頃の支配

（本家）鳥羽院 ―― （領家）藤原成通 ―― （預所）長依友

②鳥羽院崩御の後の支配

（本家）鳥羽院 ―― （領主）藤原泰通 ―― 僧智秀（備後法橋）

金峯山 ―― 三井寺

高野山

古記録では北条義時の代官としか分からないが弘長元年（一二六一）になるとはっきり伊自良氏が確認できる。

初め成通の預所であってのち地頭に補されたのか、北条氏の代官として初めて地頭に補されたのかわからない。

しかし、何となく成通荘園の預所的匂いがするのである。

この伊自良氏は、八田知家の二男有知が祖である。「坂東八館譜」を見ると「承久三年（一二二一）藤原有知、関東に味方し、戦功あり、美濃国山県郡、伊自良の地を賜わり、伊自良氏を称す」と記して

いる。

大野や、川原郷に入ったのはいつ頃か。それは全くわからない。伊自良氏を名のる以前なら、藤原氏を名のっていたはずである。

とにかく、相当早くより奥越の開拓に入っていて後、その地を賜わったようである。

色々興味ある事があるが紙数がつきたので詳しくは次回以後に述べるとして、結論を急ごう。

この伊自良有知の父、藤原知家は義経の兄であるという。

すると、有知は義経の甥である。もし、義経が美山へやってきた頃、成通荘園の預所が有知、又はその一族であったならばどうであろうか。

義経の来たという頃は、鳥羽院から時代が下って、後白河院の頃であるが、頼朝をけんせいする実力は充分であり、領家の成通の子泰通も院の重臣である。そして預所、伊自良有知は義経の甥である。

逃げまわる義経が、縁を求めて、越前へやって来るとすれば（美山町）成通荘園は絶好の隠遁の地であると考える次第である。

それに成通荘園に接して宇坂の庄（美山町）は反頼朝派の近衛基通の荘園である。都で義経はこの基通の邸に長く匿われていたという。

義経が壇の浦で世紀の勝利を得て凱旋した時、まっ先に出迎え神器を受け取ったのは、参議左近衛中将藤原泰通（成通の一男）であり、その指示はすべて御白河法皇と摂政、基通から出ている。

以上の諸事実と当時の状勢から、私は義経の最後の隠遁の地は、越前の成通荘園と基通の荘園以外にないと考えるのである。